

Title	こども学から〈こどもの哲学〉へ メルロ＝ポンティ、デューイとともに
Author(s)	高橋, 綾
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/46580">http://hdl.handle.net/11094/46580</a>
DOI	
rights	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	高橋綾
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第19936号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	こども学から〈こどもの哲学〉ヘーメルロ＝ポンティ、デューイとともに
論文審査委員	(主査) 教授 中岡 成文 (副査) 教授 鷲田 清一 講師 本間 直樹

#### 論文内容の要旨

本論文は序論、結論、そして中間考察をなす二部全4章から構成されている。本論のタイトルに含まれる〈こどもの哲学 philosophy of children〉という表現は、こどもの世界に対する問いを共有し、それについて対話しながら、知や哲学的思考が発生する場に立ち会う実践(“philosophy for/with children”と呼ばれる)と、その対話のなかで、こどもとは何か、発達とは何か、知とは何かという本質的な問いに答えていく反省的・理論的な営みという、実践と理論、哲学とこどものあいだの相互に内在的な関係を示している。

第一部では、主にM. メルロ＝ポンティの講義録の読解を導きの糸として、J. ピアジェに代表されるこどもの「科学」(児童心理学)とその「応用」としての教育学という近代こども学の枠組みに対する批判的検討を行いながら、〈こどもの哲学〉の理論的基盤が探究される。

第一章では、主として対物関係、自然の事物の認知に関するピアジェの主知主義的な知能発達論に対するメルロ＝ポンティの批判を追いつつ、知性や思考の身体的な基盤、思考と情動との連帯性が確認される。続く第二章では、こどもの他者関係について、メルロ＝ポンティ以後の研究、とくにH. ワロン、F. ドルトなどによる身体と表象に関する研究が検討され、他人との身体的な交流はこどもの発達の基礎であること、そして、大人の知性を基準としてこどもの個的な知能の機能的発達にのみ注目するならば、それはこどもの経験の豊かさを奪い、また、大人の経験や認知を成り立たせている基盤を根こそぎにし、また大人の世界とこどもの世界を結びつけ、交流を可能にしている人間性という絆を断ち切ることを意味する、と論じられる。つまり、こどもの「本質」や発達の「段階」が存在するのではなく、大人とこどもとは両者の関わりのなかで相互規定されるものであること、〈こどもの哲学〉の課題は、こどもに関わり、両者の交流を可能にするものは何か、こどもと大人の根源的同一性、つまり人間性の根源を明らかにしていくことであることが明確になるという。

第二部では、こどもとの対話の実践に具体的な指針を与えるための考察が続く。第三章では、M. リップマンの哲学教育の理論的基盤となったJ. デューイの教育論が検討され、学びとは、こどもが環境や他者との相互作用を行い、経験を拡大していくプロセスであると同時にそれが共同の実践、社会へと参加していくプロセスであること、学びという共同の実践は、ローカルな共同体に留まらず、その内部に多様性を保持し、それらを交流させるという民主主義的な共同体の実践であること、そして、価値観の多様化、専門家と市民という分裂が進む社会状況を見据え、様々な

価値観、利害を調和させ、社会の未来をまなざし、その行方を決定していくことを行う総体的な思考として哲学的思考、哲学の教育が重要性であること、が明らかにされる。また多様性の調和という民主主義の理念について現代的な文脈からの批判的検討も加えられる。

四章では、リップマンの対話の方法論の具体的な検討を中心に、その影響を受けながらヨーロッパ、オーストラリアでなされている独自の実践や申請者自身の講義、ワークショップの経験を踏まえて、〈こどもとともにする哲学〉の具体的な方策・指針が次の5つの課題、すなわち(1)論理的、批判的思考(2)創造的思考—感性的なものを活かす教育(3)状況に根ざした教育(4)対話の教育(5)市民教育をいかに実践するか、について考察される。これらの考察により、哲学をするということは、熟考し、前提を問い、論拠づけ、判断することであり、他者とともに合理性を生きること、社会の様々な問題について、共に議論し、決定していくために必要な間主観的な対話の手続きを身につけるものであることが明らかになる。感性的なものや身体的経験もまた、こうした合理性にとって外的なものではなく、哲学的な思考は、身体的な基盤を持ち、感性的なものによって活性化される。哲学的対話を実践することは容易ではなく、共同的思考を媒介する技術や教材の工夫が必要である。今後の実践的課題はこうした媒介の技術について考察と実践を行うことである。

### 論文審査の結果の要旨

本論文で扱われるテーマの一つ「こどもとともにする哲学」は、1970年以降、ヨーロッパ諸国、アメリカなどにおいて行われている教育実践である、日本での研究も教育学が中心であり、哲学研究としては長らく無視されてきたのが現状である。こうした状況のなか、申請者はイギリスやフランスでの研究会・ワークショップに参加するほか、海外の実践者を招いて研究会を企画し、また自らワークショップも試行するなど、意欲的な活動を続けている。しかし本論文は、以上の試みの単なる後追い・輸入に終わらず、本論文において、「こどもの哲学」という新しいタイトルを掲げ、これまで研究を重ねて来た M. メルロ＝ポンティ研究を援用しながら、発達心理学に対する批判、デューイ教育論の再検討をふくめた理論的考察に乗り出している点が独創的といえる。

また個々の主題においても、メルロ＝ポンティの知覚・身体論に F. ドルトの精神分析的な身体像論を接続する、あるいはデューイの学習論を「正統的周辺参加」理論によって補完する、対話環境論に関して L. ヴィゴツキーの発達論を盛り込むなど、最新の知的動向を含む広範囲にわたる関心をもとに丹念な理論的構築作業も行われている。

また、実践に関する研究においても、実際に行われた対話をとりあげ、それらを詳細に分析するとともに、それにとどまらず対話や思考を触発する素材の役割に着目し、自らもそうした素材の検討・開発に取り組むという点も、大いに評価できる。

他方で、理論と実践の双方に視野を拡大した結果、さまざまな問題を抱え込んだことも事実である。例えば、第1部での仔細な検討によって取り出された知性と身体の関係に関わる知見が、第2部における哲学的対話の方法論に十分に活かされているとはいえ、感性的素材の工夫などに論及するに留まっているほか、デューイの学習論のなかに織込まれた民主主義社会に関する考察も、デューイの主張をなぞる部分も少なくなく、批判的読解としてはやや手薄な印象を与える。後者については、対話の行われる場、教育の制度論に関する考察が盛り込まれなかったことに起因するともいえるだろう。

しかしながら、こうした欠点は本論文が〈こどもの哲学〉という新領域を切り開くとともに、哲学的対話と実践のための基礎的研究にとって輝かしい一歩を印しているという事実を否定するものではない。よって本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。